



晴れやかに、それぞれのステージへ YMCA学院高等学校卒業式



熊本ハーベストチャーチ牧師の中村陽志さんによる奨励

3月15日(日)、YMCA学院高等学校くまもと教育センター2008年度後期卒業式が中央YMCAジェーンズホールで行われ、佐伯駿くんを含め17名が新たなステージへと旅立ちました。当日は、3年間佐伯くんとともに高校に通ったお母さんの優子さんにも「サプライズ」で修了書が贈られました。

「共に生きる」心を、常に胸に留めていてください

YMCA学院高等学校 副校長 魚住秀雄さん

皆さんは入学してきた時、期待と不安でいっぱいだったことでしょう。YMCA学院高等学校は、イエス・キリストの生き方を学び、一人ひとりを尊重し、大切に、共に学び、生きる「共生」する学校を目指しています。今年度は熊本、大阪、千葉、姫路、神戸の合計5校で382名が卒業を迎えます。熊本からの卒業生は17名ですが、皆さんには多くの仲間がい

るということを忘れないでください。

YMCA学院高等学校に入学する前に、別の高校に通っていて、学期の途中で入学した人もいると思います。入学した時期も学んだ時間もそれぞれ違います。少し時期が違えば出会えなかったのです。だからこそ、お互いが過ごした時間はかけがえのないものです。高校を卒業後、次のステージに進み、困難なことにもぶつかった時は、高校時代をともに過ごした仲間の顔を思い出してみてください。きつと前に進む勇気が出ることでしよう。

皆さんがこの日を迎えることができたのは、必死に導いてくれた周囲の人たちがいたからです。これまで出会った周囲の人への感謝の気持ちを持って持ち続けてください。あなた一人ではありません。今後YMCA学院高等学校の考え方である「共生」という言葉を忘れずに進んでください。



佐伯駿くんと優子さん

自分から動くことで、いい出会いが訪れる

保護者代表挨拶 佐伯優子さん

駿は、生後まもなく重度の脳性まひと診断されました。私は「駿が大人になる頃には、障がい者に対する理解というのにも深く関わっているだろう」と楽観的に考え、子育てをしてきました。

小学校は養護学校でしたが、中学校は地元中学校を卒業できたので、本人も私も、高校も地元の学校に進学することを望みました。しかし、3〜4校に入学を断られ、障がい者に対する「社会の壁」を進学の度に強く感じさせられました。世間ではバリアフリーの必要性が問われたり、「ノーマライゼーション(障がい者や高齢者などが、社会の中で健常者と同じように生活できる環境を目指す活動のこと)」という言葉が使われています。しかし、実際に行動してみると、障がい者を受け入れる社会ではなかったのです。そんな中、入学を受け入れてくれたのは、YMCA学院高等学校でした。

駿の隣りで勉強した3年間は、とても有意義な時間でした。自分の年齢で高校に通う機会を与えてくれた息子に感謝しています。特に、入学してすぐの「ウエルカムデイキャンプ」は、クラスのみならずという活活動をするうちに、ほとんど初対面の人たちと少しずつ打ち解け合えたので、楽しい思い出となっています。今日卒業を迎える皆さんには、「自分から動くことで、いい出会いが訪れる」という言葉を伝えたいと思います。動くためには多くの勇気が必要です。じつとしていければ楽ですが、良いチャンスも逃してしまつたのではないかなと思うからです。

息子が強く願ったことは、必ず叶えられてきました。「高校に通いたい」という願いもそうです。求めれば必ず道は開けます。皆さんには、支えてくれる親や先生をはじめ、応援してくれる人たちがついていきます。私も息子もYMCAに救われました。今後も胸を張ってたくさんの「いい出会い」にワクワクしながら、自ら動く

いていきたいと思えます。

中身のある大人を目指します

クラスメイト 大串光貴さん

無事に高校を卒業できたのも、先生やクラスメイト、自分の周囲の皆のおかげです。高校生活はあっという間でした。佐伯くんとお母さんには、必ず挨拶をして会話をすることが知らず知らずのうちに「クラスのルール」になっていました。教室の雰囲気は何となく悪い日も、佐伯くんとお母さんに皆が話しかけることから雰囲気や和んでいきました。佐伯くんのお母さんの「動かないといい出会いはない」というメッセージ、佐伯くんの「勉強したい」という強い意志を心に刻んで、中身のある大人になることが僕の目標です。

敬服の気持ちで「うっぴいっす」

講師 野口チカ子さん

佐伯くんの学習に対する強い気持ちと、佐伯くんの気持ちを尊重するお母さんには、敬服の気持ちでいっぱいです。雨の日も風の日も、3年間、人吉から片道1時間半をかけての送迎と、一緒に学ぶということとはなかなか続けられることではないと思います。どのように感じているのか、組みとりにくかった佐伯くんの表情も、授業を通して次第に伝わるようになりました。

また、今年のお正月には、字を書くことが苦手な生徒から、手書きの年賀状をもらいました。この時、本当に30年教師を続けていて良かったと感じました。教える側の私も、学ぶ大切さを佐伯くんに教えてもらい、教わることの多さを感じています。

わたしと聖句

ヨハネ伝福音書第3章16節(文語訳)

神はその独子を賜うほどに世を愛し給へり。

日本基督教団 大牟田正山町教会 梅崎 浩一

「われらを」

高校卒業の春、釜ヶ崎という日雇・野宿労働者の街に足を踏み入れた。SCM(学生基督者運動)第一回現場研修に参加したのである。

強烈な現実と魂を驚愕にさせ、大学でも神学より「釜」通いに没頭した私は、遂に教務主任に呼び出され、「社会改革が大事なら社会事業家になれ。退学せよ」と迫られた。「辞めぬ」と言下に応えはしたものの、私の心は荒み、揺れた。そんな折に出会った一冊が晩年、山谷で伝道した中森幾之進牧師著「下へのほろ歌」である。著者が戦前、私と同じ神学部に学び、在学中はSCMの活動で被差別部落に深く関わった為に退学を迫られていたことを知った。驚きであった。記された真実な魂の遍歴は深い慰めとなった。

卒業、教師となった後、与えられた子を幾之進と名付けたところ、それを知った御息が父君中森牧師の書を贈って下さった。そこには冒頭聖句の「世を」が「われらを」と換えて記されている。この世に向けられた神の愛を私と等しく隣人にも向けられたものと捉えた「われらを」の一語に、私の心は震える。玄関に掲げたこの書に励まされて、私は今もホームレス支援に携わっている。